

専修大学 図書館だより 第50号 2003.7

C O N T E N T S

| | |
|--|-----|
| 「図書館だより」第50号を記念して (図書館長 毛利 健三) | 2 |
| 情報化社会と未来図書館 (齋藤 雄志) | 3 |
| 研究報告『近世日本関係英国史料集成』刊行と図書館 (島田 孝右) | 4~5 |
| 図書館のあゆみ Messages from Chief Librarians | |
| ● 図書館長時代の思い出 (中田 武司) | 6 |
| ● 「図書館だより」第50号記念によせて (泉 久雄) | 6 |
| ● 生田分館開設の思い出 (久重 忠夫) | 7 |
| 専修大学図書館略史 | 7 |
| 資料紹介 『ラ・カリカチュール』LA CARICATURE | 8 |
| 平成15年度 図書館委員会委員紹介 | 8 |
| 編集後記 | 8 |

「図書館だより」第50号を記念して

図書館長 毛利 健三



「図書館だより」は本号で第50号を数える。第1号は1987年7月に発刊されているので、ちょうど16年の年月が経過している。学年歴にしたがって整理してみると、ほぼ定期刊行が定着した1989年度からは毎年度3号を刊行している年度がもっとも多いが、5号刊行の年度もあり(1997年度)、また、1999~2001年度には毎年4号を刊行している。

「図書館だより」は、当然のことながら、その間の本学図書館の歩みを映しだしている。幾つか話題を拾ってみよう。本学が創立100周年記念事業の一環として「ミシェル・ベルンシュタイン文庫」を入手したのは1977年のことであるが、そのカタログ整備作業の進展とともに公開推進にかんする記事が何度か登場するのは自然のなりゆきであろう。1995年あたりからは、図書館本館が入居する9号館(120年記念館)建設の槌音が高まる期待を乗せて紙面にも響きわたるようになる。そして、第33号(1998年4月)は、竣工成った120年記念館に新図書館がオープンしたことを祝い、ブラウジング・プラザやAVプラザなどの新鋭施設の数々を広報しつつ、200万冊の収納スペースをもつ書庫完成に一息ついている。

その後も図書館は発展と充実への足を休めない。新図書館の開設に踵を接して旧生田本館の再生プラン作りが始まり、学生利用主体の図書館をめざして新生「生田分館」の完成に漕ぎつける。第44号(2001年4月)は「生田分館開館特集号」と銘打って刊行されている。この間、ハード面だけでなくソフト面でも図書利用と図書管理の両面で幾度か新しいシステムの導入が

試みられ、大きな改善が図られてきたことはいうまでもない。

このように、「図書館だより」50号が刻んできた16年間は、まさしく専修大学図書館の飛躍の時期であったことがわかる。

本学図書館のこのような発展に貢献されてきた関係者のすべての方々にはたいして深甚の敬意を表する次第である。また、この間研究教育と学習にひたむきな努力を積み重ねられてきた全学の教職員・学生諸氏とともに図書館充実の喜びを分かち合いたい。それと同時に、このような目覚ましい発展にもかかわらず、なお残されている不備や欠陥についても、この機会に謙虚に反省し、今後も図書館環境の改善に挑戦しつづける新たな決意を表明しておきたい。

生田分館の玄関ホールの壁面には《VERITAS NOS LIBERABIT》「真理はわれわれを自由に」という語句が掲げられている。この字句通り、本学において真理への情熱と畏敬の念が他のすべての配慮に優先し、真理が保障する自由な精神が全学に充溢することを希望したい。

(もうりけんぞう：経済学部教授)



情報化社会と未来図書館

情報科学センター長 齋藤 雄志



情報化社会は、デジタル技術にもとづくコンピュータとネットワークによって情報の時間的制約と空間的制約が緩和され、そのことにより産業の生産性と生活の利便性が向上した社会である。一方、現代社会は100%情報化社会でもないし、すべての情報がデジタル化したわけではない。サラリーマンとして会社や役所で働く人々も、学生、教師、研究者などをとっても、日常的に扱っている情報の相当な部分は紙に書かれた古典的情報である。紙はコストが安く、可搬性や視認性に優れ、貯蔵性能もよいので依然として情報の蓄積・伝達の相当部分を占めている。

紙による情報の提供と蓄積の最大の欠点は検索性の低さである。最近では図書館でも検索システムが進みつつあるが、もとの情報源が紙の本なので、何かを探そうとするときに検索することができるのはタイトルや著者名など一部に限定される。利用者からいえば、目次も検索できたらよいと思うし、すべての本の全文が検索できたらよいと思うであろう。これは第1段階の未来図書館である。これには著作権の問題とデジタル化の費用が絡むので容易でない。現時点では、本のデジタル化には相当な費用がかかるが、技術的にはかなり費用を下げるができる。たとえば、自動的に本をめくり、イメージを読み込み、文字を識別し、データとして蓄積する機械の製造はそう難しいとは思えない。絵などの画像の検索などでは問題が残されているが、要するに最後の問題点として残るのは著作権の問題である。著作権は、知識を創作した人の労力にどれだけ価値をみとめるかの規定であり、それは社会の選択

である。

だが著作権の問題を棚上げし、すべての情報の高速検索が可能になったとしても、人間や組織の知識処理能力に限界があることを忘れてはならない。すでに現在においてほとんどの人々はかつては考えられない膨大な情報を利用することができる環境を得たように思うが、日常の進歩はそれほどでもない。我々は会社や家庭でワープロソフトや表計算ソフトあるいはインターネットを使っているが、さして昔とそれほど変わらない仕事や生活をしているようにも見える。つまり、本や新聞あるいは図書館という存在はわれわれのベースに合うのである。それどころか、最近では本や新聞もよく読まないという人々が増えているという。情報化社会の中で肝心の伝達される情報や知識の水準が低下しているような面もある。これは情報を受ける主体の問題でもあるし文化の問題である。

情報化社会では、情報の処理速度と伝達速度が飛躍的に向上したが、そこで扱われる情報は記号あるいは単純な構造をした定型的情報が中心である。複雑な構造をもつ知識の伝達や理解はまだ扱えない。コンピュータが本を自動的に理解しその意味内容を検索してくれるような、いわば第2段階の未来図書館が実現している世界では、ネットワークで結合された人工知能が世界中の図書館の本を読み、膨大な知識を蓄積するだけにとどまらずに、SFのように意識をもち、人間を支配する世界かもしれない。

(さいとう たけし：ネットワーク情報学部教授)

『近世日本関係英国史料集成』刊行と図書館

島田 孝右

『近世日本関係英国史料集成』(現在24巻)は、英語で書かれ、英国で1800年までに刊行された刊行物(翻訳を含む)の中から、日本関係の記録を集めたもので、原文を収録するとともに3種類の索引をつけたものである。今年10月の第5回配本と来年10月に予定している総索引の刊行をもって一応仕事が終了する。

専修大学に勤め始めたのは、17年前であった。以来史料収集のために図書館のマイクロ資料室に日参する毎日であった。史料集を出版するあては全くなかったが、いつか価値を認めてくれる出版社がでてくるだろうと、文字通り夏休みも、冬休みも、春休みも、ほぼ毎日図書館に来て、マイクロリーダーを操作して調査を続けた。

マイクロ資料室? マイクロリーダー? それ何、と首をかしげる人もいると思われるが、高価で入手し難い貴重書をきわめて手軽に読め、研究者にとってなくてはならないものである。専修大学には15世紀から18世紀までのあらゆる分野の刊行物(英文)を収めたマイクロフィルムが約17,500リールある。これは早稲田大学に次ぐ数で、大いに誇れる財産である。

17年前、フィルムは今の生田分館に保管してあった。室内は暗く、狭かったが、簡単に自分で取り出せて都合がよかった。なぜなら、1800年までの刊行物を収めたフィルムを1コマ1コマ全部調べるつもりでいたから、スピードが肝要だったのである。とにかく、決意もあらたに、嬉々として収集作業を始めた。しかし、大きな問題があった。それは、18世紀だけでも約30万冊の本が刊行され



ていることだった。それに全部目を通すためには、1日に何冊、何リールチェックする計算になるのか、考えただけでも恐ろしかった。この話をきいた友人は、狂気のさただと言ったものである。とにかく時間が足りなかった。仕事を急ぐために、手動のリーダーを図書館から借りて自宅でも作業をすることにして、大学と自宅とで1日に6~7時間は調べた。視力は低下したが、そんなことはどうでもよい、という気持ちで

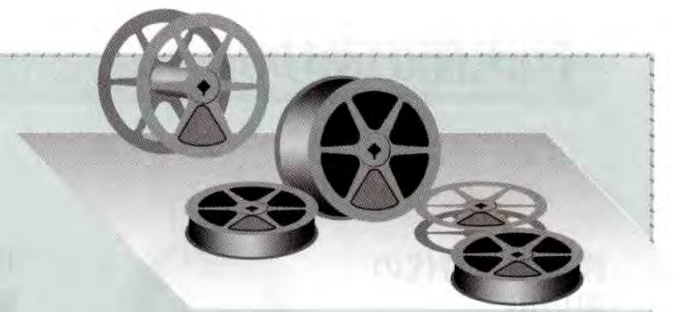
あった。26歳の時に決意して以来継続してきたこのライフワークを中断するわけには絶対いかなかった。それは大学時代の師を超える仕事はこれしかないと思っていたからであり、意地でもあった。

史料をマイクロで調査する作業は、肉体的には決して楽ではない。例えば、日本の記述を探し出すといっても、はじめからどの本の何頁にあるかがわかっているわけではないから、見落としがないように細心の注意を要する。大型のフォリオ版で20巻の作品を調べるには3日かかる。しかし、その最後の頁まで調べても、日本の記述がないということもあった。また、激しい肩こりで苦しんだ日も多かった。その上、加齢とともに作業は遅れがちになっていった。

この17年間に図書館も姿を変えた。9号館が完成して、明るい素晴らしい環境となり、リールの数も飛躍的に増えていった。マイクロリーダーの利用時間を延長して欲しいなど、お願いしたいことが全くないとは言わないが、研究者にとってこんなに良い条件の図書館は他にない。以前勤めて

いた大学は理系で、教養関係の図書は絶望的に少なかった。しかし、図書室のような小さな図書館の館長にお願いして、マイクロリーダー(非常におまつなものであった)をキャレル(図書館の個室)に置いてもらい、日曜日でも出入りができるようにしてもらった。今思えば恥ずかしい注文をしたと反省しているが、当時は収集することだけしか念頭がなく、無茶な要求だとは思わなかったのである。しかし専修大学と違い、フィルムの購入は全部個人負担であった。

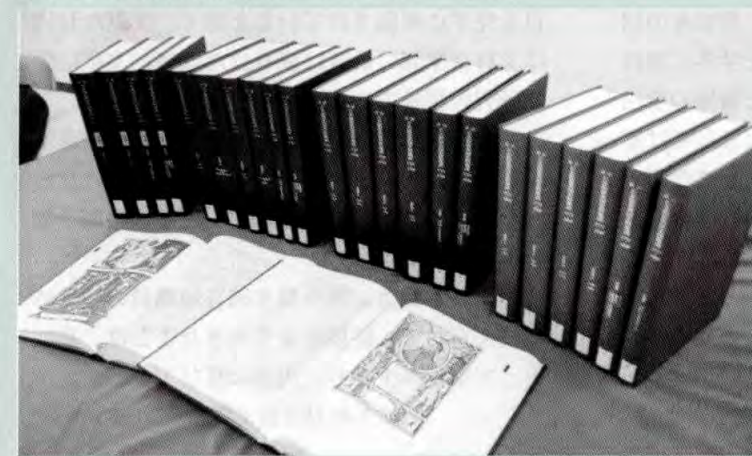
色々な刊行物を調査していると、各時代の本の特徴がわかるだけでなく、著者の気持ちが伝わってくると感じることがある。それはマイクロフィルムで読む場合でも同じである。これまでに収集した史料の数は約1,360点である。日本について何を語り、何を伝えているのか。18世紀以前については、この疑問への答えはだせたように思う。しかし、19世紀はどうか。私の次の仕事は、『19世紀日本関係英国史料集成』の刊行である。この世紀の史料は膨大である。1850年までに限定すべきか、あるいは1900年までとすべきか、今苦しい



図書館4階 AVプラザにて

選択を迫られている。更に、『近世中国関係英国史料集成』も同時並行で進行中である。しかし、苦しいほどやりがいがあるという考え方もある。再び数十万冊への挑戦を始めなければならないのか、ハムレットの心境である。恐らく、これからも図書館通いをする事になるだろう。

(しまだたかう：商学部教授)



『近世日本関係英国史料集成』
島田 孝右 編
1555-1700 ; 1701-1730 ;
1731-1770 ; 1771-1800
Tokyo : Hon-No-Tomoshia,
1999-2002
各巻は、史料篇(4冊)、目録篇
(1冊)、索引篇(1冊)から成る

図書館長時代の
思い出

第13代 図書館長
(1984～1994)
中田 武司



「思い出」というと、「聞こえ」は良いが、これは結果が良かったときの感慨であろう。結果が良くなくても、「思い出」は時間の経過とともに懐かしくなるものと相場が決まっている。事が生命に関わることでもない限り、「思い出」は懐かしいことへと変転するであろう。

現120年記念館は初期の長期構想委員会が設けられて、その方向性を検討していた段階では、旧図書館の狭隘さの解消をどうするか、というのが中心であった。これが大学全体の構想と連関することとなってからは、各部署所属のこれまでの不満や欲求が一時に表に出てきて、構想の方向性すら暗中模索的なもので、検討とは名ばかりで、恰も場所取りさながらに近いものであった。このような中であって、図書館の区画は初期の構想とは随分かけ離れたものになってしまった。その喧騒の中で実施されたのが、図書^{あつか}の学外保管という発想であった。日常身の回りに置いてこそ役立つ図書や資料を学外に委託保管するのであるから、思いきった論座の手法であった。学外保管が全学の協力なくしては不可能な事や、現場との諸連絡の万全配慮などと同時に、毎日早出し^{はやで}しながら閲覧用の机席^{きせき}や書架の整備をしている図書館職員の姿を目にする人々の心に徐々ではあるが、我が事のように波紋^{てんてん}は輻射した。「知恵は出して見るものである。」ほろ苦い思い出が今も脳裏を過ぎる。

(なかだ たけし：文学部教授)

「図書館だより」
第50号記念に
よせて

第14代 図書館長
(1994～1998)
泉 久雄



私の図書館長在任時は専修大学図書館が大きく飛躍するための基礎固めの時期にあたり、そこに向かって図書館職員が一丸となって、地道な努力を重ねた時期であったと思う。生田120年記念館の完成(平成10年3月)を前にして、21世紀における大学図書館のあるべき姿が問われていたし、旧本館(現生田分館)の新しい利用形態も話題に上っていた。今、大学図書館としてその偉容を誇る本館の姿は、そうした大学人の理想像を求める精神の結晶である。歴代の関係者に敬意を表さなければならない。

つぎに大学所蔵の文庫の整理が進められたことも忘れるわけにいかない。館長就任早々に『菊亭文庫目録』の完成が報告されたし、『今村力三郎文庫目録』、『石井良助文庫目録』、『中川善之助文庫目録』と相次いで刊行された。いくつかの大学においては、諸先生の貴重な蔵書が陽の目を見ずに死蔵されていると聞く。文献なしには文科系学問の研究は成り立たない。文献は学問研究の根幹である。

また、定期刊行物の登録・整理とか、図書館規則の遵守といった図書館運営に手をつけたことも記憶に残る。継続を求められる図書館予算の執行はむずかしい。

いずれにせよ、誇り高き図書館職員の諸兄姉に支えられて、任期を全うできたことは、私にとって楽しみであり、大きな喜びであった。

(いずみ ひさお：名誉教授[法学部])

生田分館開設の
思い出

第15代 図書館長
(1998～2002)
久重 忠夫



私は昨年3月まで館長職にありましたので、さまざまな思い出が鮮やかによみがえって来ますが、とくに記憶に深く残っている思い出は、生田分館開設の仕事です。

5年前の生田分館開設準備は、新しいタイプの学生図書館を作る試みの大きな機会でした。学生の読書のための新しい場、「知的感性的遊戯空間」を作るという基本コンセプトを立て、館長就任の初仕事としてさまざまな模索をしたことが懐かしく思い出されます。

分館の開設には、閲覧席数の拡充ということが、必要条件ではあったのですが、それだけでは物足りない、なるべく多くの学生が集まる空間でなければならないというのが関係スタッフ共通の願いでした。

さまざまのアイデアが実現されましたが、そのうち二つだけあげますと、辞書・事典類はともかくとして、本館にすでに所蔵されている図書と同じものを集めるだけでは魅力がないということで、本館には所蔵の少なかった文庫・新書類の主なものを網羅的に収集することになりました。また、すでにクラシックとなっている漫画本も、現代日本文化の代表的作品として敢えて収集すべきであるという観点から、一部の反対を承知しながらも冒険したところ、その部屋に学生諸君から思いがけないような大きな反応があったことは、分館開設の日にも館長であった者として大きな喜びでした。

(ひさしげ ただお：名誉教授[文学部])

| | |
|-------|--|
| 1987年 | ●図書館だより第1号刊行 |
| 1988年 | ●「専修大学図書館蔵古典籍影印叢刊」第二期刊行(～1995年) |
| 1989年 | ●専修大学創立110年・フランス革命200周年「ミシェル・ペルンシュタイン文庫展」学内外8会場で巡回開催 *学生への貸出冊数変更:5冊15日 |
| 1990年 | ●スペース狭隘の為、資料の一部を学外保管開始 |
| 1991年 | ●藤原(花山院)師継筆『古今和歌集』(本館所蔵)重要文化財に指定される |
| 1992年 | ●図書館電算システムを新システム(丸善CALIS)に移行 |
| 1993年 | ●OPAC検索稼働 |
| 1994年 | ●蔵書数100万冊を超える ●特別展示 ルカ・パチョーリ著『簿記論』出版500周年記念「複式簿記の伝播：中世ヴェネツィア商人から現代企業へ」開催 |
| 1995年 | ●『菊亭文庫目録』『今村力三郎文庫目録』刊行 |
| 1996年 | ●ベストセラー等からなる「育友文庫ジョイ」設置 ●『石井良助文庫目録』刊行 |
| 1997年 | ●専修大学120年記念館(9号館)竣工 ●『中川善之助文庫目録』刊行 |
| 1998年 | ●120年記念館内に専修大学図書館(新本館)開館 ●インターネットによる図書館の情報発信開始 ●夏期休暇期間オープンライブラリー開催 ●高校生に施設を開放 |
| 1999年 | ●本館4階AVプラザでインターネットによる情報検索開始 |
| 2000年 | ●第61回私立大学図書館協会総会・研究大会を生田校舎で開催 ●「専修大学創立120年記念図書館所蔵特別資料展」開催 |
| 2001年 | ●図書館システムCALISからLiswaveに変更 ●インターネット対応のOPAC検索開始 ●教員推薦図書設置 ●生田分館開館 ●生田分館開館記念特別展示「西洋文字遺産集成」「書物5000年」「美しい書物の世界」開催 |
| 2002年 | ●特別展示「イタリア・ルネサンスの商人に宛てた賜物 ルカ・パチョーリ著『スママ』」開催 ●校友・育友への貸出開始 *学生への貸出冊数変更:10冊20日 |
| 2003年 | ●神田分館7号館分室を開室 ●図書館だより第50号刊行 |

1987年以前の図書館略史は、専修大学図書館ホームページ <http://www.lib.senshu-u.ac.jp> をご覧下さい。

『ラ・カリカチュール』
LA CARICATURE

「カリカチュール」とはフランス語で「風刺画」という意味です。

1830年から1835年までの5年間に刊行された週刊の新聞。毎号、美しいリトグラフが2点つきました。これらの版画は時の権力者ルイ・フィリップ王とその政府を痛烈に風刺したものです。

シャルル・フィリポンが率いるこの新聞は、グランヴィルやドーミエらの手による優れたリトグラフ風刺画で知られます。1830年11月の創刊から、言論弾圧法である「九月法」成立直前の1835年8月までの毎週（全251号）発行されました。

大革命後のフランスでは、壮絶な権力争いがありナポレオン、王政復古後七月王政が誕生します。しかし、自由と平等を求めた革命から生まれた七月王政は、次第に支配階級であるブルジョワの利害ばかりを重視したものと変わっていきます。そうした政府に対して、敢然と戦いを挑んだのが風刺新聞「ラ・カリカチュール」紙です。

町田市立国際版画美術館で4月19日から6月8日まで「ラ・カリカチュール王に挑んだ新聞」展が開催され、本学所蔵の「ラ・カリカチュール」も出品されました。

2003年の本学図書館案内の表紙には128号の図版が挿入されています。



104号「大自由狩り」グランヴィル 1832

平成15年度 図書館委員会の員紹介

| | | | |
|------|------------|------------|-------|
| 学 部 | 経済学部 | 教 授 | 唐鎌 直義 |
| | | 助教授 | 田中 隆之 |
| | 法 学 部 | 教 授 | 高木 侃 |
| | | 教 授 | 平田 和一 |
| | | 教 授 | 藤本 一美 |
| | 経営学部 | 教 授 | 山崎 秀彦 |
| | | 講 師 | 佐藤康一郎 |
| | 商 学 部 | 助教授 | 伊藤不二洋 |
| | | 助教授 | 手嶋 宣之 |
| | | 講 師 | 首藤 昭信 |
| | 文 学 部 | 教 授 | 乾 吉佑 |
| | | 教 授 | 小山 利彦 |
| 教 授 | | ポレット ウィリアム | |
| 教養教務 | ネットワーク情報学部 | 教 授 | 森 克美 |
| | 経済学部 | 助教授 | 土屋 昌明 |
| | 商 学 部 | 教 授 | 高原 隆明 |
| | 文 学 部 | 教 授 | 嶋根 克己 |
| | 文 学 部 | 講 師 | 田中 正敬 |
| | 教職課程 | 文 学 部 | 教 授 |

(教員委員)

編集後記

今回で「図書館だより」第50号を刊行することができました。試行錯誤の連続ではありますが、1987年の第1号発行から16年にわたってニュースや利用者へのメッセージを伝えて来ました。その間、自宅からでもインターネットによって図書資料の検索が可能になるなど、図書館も大きな変化をとげました。今後もいかに利用者の要望に応じていくかという課題に取り組みながら、「図書館だより」「SENSHU UNIVERSITY LIBRARY INFORMATION」「図書館ホームページ」とおし、皆様とコミュニケーションを図っていきたいと思っています。

4年間にわたり図書館委員としてご活躍いただいた野口眞先生(経済学部教授)が4月にご逝去されました。心よりご冥福をお祈りいたします。(広報係)

専修大学図書館だより 第50号

発行日：2003年7月1日

編集・発行：専修大学図書館 館長 毛利 健三

専修大学図書館 本 館 神奈川県川崎市多摩区東三田2-1-1 〒214-8580 Tel. 044-911-1274(直)

生田分館 神奈川県川崎市多摩区東三田2-1-1 〒214-8580 Tel. 044-911-7138(直)

神田分館 東京都千代田区神田神保町3-8 〒101-8425 Tel. 03-3265-8339(直)

専修大学図書館ホームページ <http://www.lib.senshu-u.ac.jp/>